

# 2010年冬鳥ウォッチ報告

平野敏明（バードリサーチ）

今春はいつにも増して慌ただしく時間が経ち、気がつけばもう鳥たちの繁殖の季節となりました。冬の間、私たちの身近で愛らしい姿を見せてくれていたジョウビタキやカシラダカも、いつの間にか繁殖地へと旅立っていました。さて、2010年の冬（以下今冬）の冬鳥たちの渡来状況はどうだったのでしょうか。以下に、今冬の冬鳥ウォッチの調査からカシラダカ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ハギマシコ、イスカの生息状況について報告いたします。



マヒワ（撮影：大塚啓子氏）

## 調査状況

今冬は、4月10日までに関東地方から九州・沖縄地方の40名の皆さんから合計100件の情報が報告されました。6種の情報の合計は163件で、2008年冬に次ぐ記録の多さとなりました（図1）。地域別の件数は、今冬も関東・東海地方が約50%と最も多く、次いで中部・北陸地方（21%）、九州・沖縄地方（15%）、近畿地方（14%）、四国（1%）の順でした（図2）。一方、今年は中国地方や東北・北海道地方からは情報が得られませんでした。今年、冬鳥ウォッチの情報が送付される3月に東日本大震災が起きてしまい、日本中が鳥どころではなかったのではないのでしょうか。そのため、今冬の情報も多くは、震災前にご報告いただいたものでした。また、北日本では冬期の調査は積雪などの問題もあり、なかなか十分な観察ができないのかもしれない。

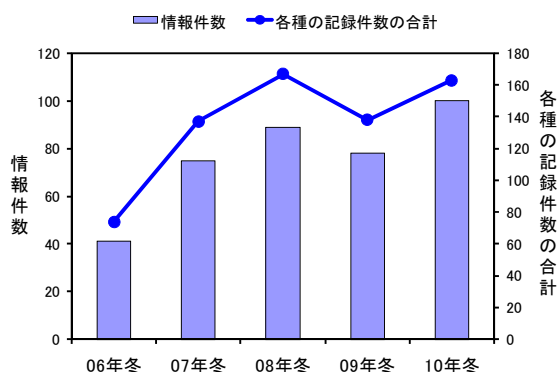


図1. 冬鳥ウォッチにおける情報件数および種ごとの情報件数の合計の推移

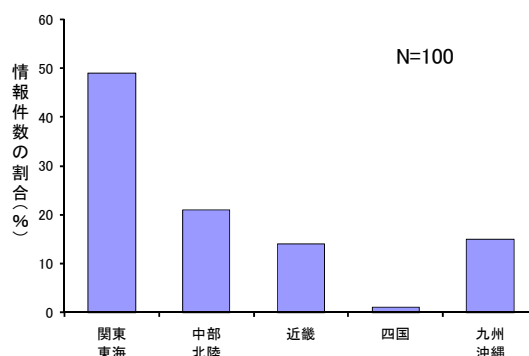


図2. 2010年冬期の地域別情報件数の割合

### 記録種および記録状況

今冬は、調査対象種の6種のうち、イスカを除く5種が記録されました。各種の記録状況を見ると、最も多かったのはマヒワで56件、次いで多いのがカワラヒワ50件、カシラダカ25件、ハギマシコ18件、アトリ14件の順でした。図3は、各種の5年間の情報件数の割合の推移をまとめたものです。過去4年間、カワラヒワは常に最多の情報件数が得られていましたが、今冬はマヒワに首位の座を明け渡しました。これは、今冬にカワラ

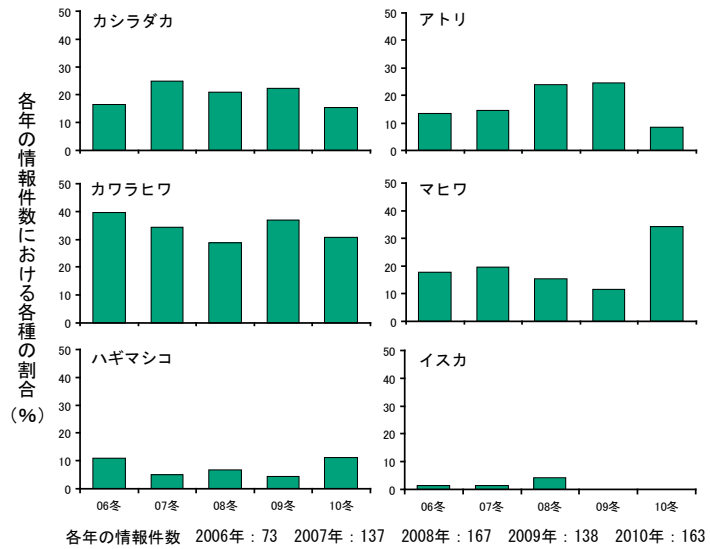


図3. 5年間の各種の情報件数の割合の推移

ヒワの情報件数が少ないことによるのではなく、マヒワの情報件数が多かったためでした。カワラヒワの07年冬から09年冬の3年の情報件数をみると47件から51件で、今冬の情報件数50件とほとんど変わりませんでした。一方、08年、09年の冬に情報件数の多かったアトリは、情報のなかったイスカを別にするると最下位でした。

次に、図4は、今冬のそれぞれの種の地域ごとの記録状況をまとめたものです。このうち、情報件数の多かったマヒワは、情報のあった4地域すべてで26~47%と多くの割合を占めていました。このことから、今冬のマヒワは、少なくとも関東以西に広く渡来したことがわかります。

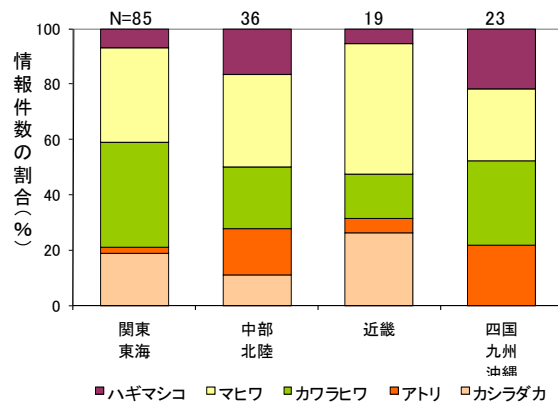


図4. 2010年冬期の地域別記録件数の割合

一方、アトリは、中部・北陸地方や四国・九州・沖縄地方では情報件数の割合が16.7~21.7%とやや多かったものの、関東・東海地方ではわずかに1件(2.3%)だけでした。また、カシラダカは、四国・九州・沖縄地方からは情報がまったく得られませんでした。カシラダカの地域的な情報件数の違いは、今冬に限ったことではなく、昨年までも九州地方で情報が得られていないことがわかっています。これが本種の越冬分布の違いによるものか、たまたまこの地域での情報が少ないために記録が得られていないだけなのか、今後の調査で確認したいと思います。さらに、今冬のマヒワは、地域区分によって情報件数の割合にばらつきがあるものの、4地域で記録されました。昨年までの調査から、ハギマシコの記録は中部・北陸地方から東

の地域で多く得られていましたが、今冬は九州地方からも複数の方から記録が報告されました。したがって、ハギマシコもマヒワ同様に全国的に多かったと言えるでしょう。

### 個体数の記録状況

図5に、記録件数の多かった4種の07年冬以降の個体数ランクの推移を示しました。カシラダカは、毎年個体数ランクが21～50羽以下が多いのですが、今冬では1～20羽のランクの割合が例年より少ない一方で、51～100羽以上のランクの割合がやや多くなりました。アトリでは、各個体数ランクの割合は、4年間で大きな変化はありませんでした。しかし、今年は、個体数ランク201羽以上の大きな群れも記録されましたが、1000羽前後が1件のみで、2008年や2009年冬の5000羽や10000羽、さらには75万羽に比べると、個体数でも大変少なかったと言えます。また、カワラヒワは、今冬では2007年や2008年冬と同じような個体数ランクの割合をしていました。一方、マヒワは、1～20羽の小さな群れの割合が多かったものの201羽以上の群れも記録されました。ただ、実際の個体数による群れの最多羽数は約300羽で、前述の2008年や2009年に記録されたアトリの群れと比べると小さな群れと言えます。

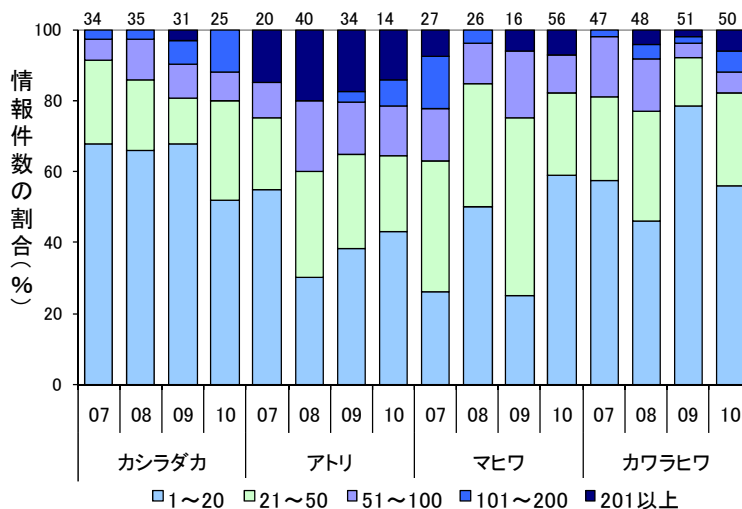


図5. 2007年以降の主な種の個体数ランクの年ごとの変動。グラフの上の数字は情報件数を表す。

### まとめ

冬鳥ウォッチは2010年冬で5年が過ぎました。その間、年によって冬鳥たちの渡来状況も変動し、だいぶ冬鳥たちの渡来状況の特徴がみえてきました。特に、アトリとマヒワは、この5年間でその変動を目の当たりに記録することができました。

前述のように、アトリは2008年と2009年に情報件数が著しく多かった一方で、2010年冬には全国的に情報が少ない傾向がありました。そして、記録個体数も情報件数の多かった2年間より2010年では少ないこともわかりました。また、マヒワは、2009年では情報件数が著しく少なかったのが、2010年では急激に多くなり5年間で最多になりました。しかも、2010年では、関東から西の地域に広い範囲に亘って飛来したことがわかりました。こうしたアトリとマヒワで得られた年による記録件数の変動は、個体数の情報も合わせる

と、その冬の日本への渡来数の多少を明確に示しているものと思われます。さらに、両種に見るこのような変動は、徐々に増加してピークを向かえ、その後に徐々に減少するという緩やかな山型の変動と言うより、どちらかというとき急に増加と減少が生じているように見えます（図3）。さらに図3から、その変動の時期は、同じアトリ科の種であるマヒワとアトリでは異なっているらしいことも見えてきました。日本で越冬する両種の繁殖地の正確な場所はわかっていませんが、ユーラシア大陸東部における両種の繁殖地は多少重複しているものの異なっています（del Hoyo et al 2010）。ですので、2種の渡来状況のずれは、両種の繁殖分布の地理的な違い、主要な食物の違いやその豊凶の違いによるのかもしれませんが。

さらに、英国などでは、マヒワはアラスカトウヒの結実量と深く結びつき、不作の年には住宅地周辺に飛来し餌台の餌を多く利用することが報告されています（Makenzie et al 2007）。今冬にマヒワの記録が多かったものの、一部の調査者の方から山地の林にはそれほど多くないというコメントもいただきました。マヒワの情報をみると、201羽以上の大きな群れが観察されたのはすべて丘陵林や低山の林で、山地帯の森林からは小さな群れが記録されただけでした。2010年秋は、2006年の秋と同じように、クマが人里に出没し山地のブナなどの実が不作の年と言われています。とすると、マヒワの主食のカラマツなどのマツ類の結実量も少なかったのかもしれませんが。そのために、平地へいち早く降りてきた可能性もあります。

ところで、マヒワの記録に隠れて目立ちませんが、今冬の特徴のひとつにハギマシコの記録が多いことがあります。ただ、ハギマシコはどちらかというとき山地の林道沿いのガレ場や農地などに生息し、あまり平野部の市街地近郊へは出現しません。そのため、マヒワのように記録件数が伸びませんが、今冬は近畿地方や九州地方からも記録があり、渡来数が多かったものと思われる。



写真2. 電線にとまるハギマシコ  
(撮影：新井清雄氏)

一方、イスカは09年、10年冬と2シーズン情報が得られていません。春になってから北海道で群れが観察されているという情報をいただきましたので、日本へまったく渡来していないわけではなく、人目にあまりつかなかったということなのでしょう。ただ、この調査を開始して5年が経過しますが、2008年に少し記録が得られただけで、大きな群れは見られていません。たまたま日本へ大きな群れが渡来しないだけなのか、それとも繁殖地における個体数が減少しているのか気になります。

以上のように、冬鳥ウォッチを通していくつか興味深い生息状況が得られつつありますが、冬鳥ウォッチはまだ5年目です。今後も継続して調査を続けることで、冬鳥たちの渡来状況についてさらに新たな情報が得られることと思います。次にアトリの情報が増加す

るのはいつなのでしょう。2011年冬のマヒワやハギマシコはどのように変動するのでしょうか。さらに、ここ2年記録のないイスカは記録されるのでしょうか。今後もぜひ継続してご協力いただければ嬉しいかぎりです。

末尾ながら今回調査にご協力いただきました皆様のご芳名を記してお礼に変えさせていただきます。また、被災地におかれましては、一日も早い復興をお祈りいたします。

新井清雄，有賀美和，池英夫，石塚文信，石濱徹，井上賢三郎，井原隆，今森達也，植田睦之，上山義之，内田博，大塚啓子，大友哲也，加塩弘己，梶本恭子，河端正太郎，木村有紀，久保賢一，越川重治，児玉法子，小林俊子，小堀脩男，小松周一，斉藤けい子，齋藤甚蔵，齋藤映樹，高橋邦年，嵩原建二，栃谷満夫，仲埜皎朔，二村一男，野中純，平野敏明，藤田和彦，宮崎八州雄，村田安正，山本貴仁，山本裕三，脇坂英弥，渡辺美郎（五十音順 敬称略）

### 引用文献

del Hoyo J, Elliott A & Christie D. 2010. Handbook of the birds of the world, Vol.15. Lynx, Barcelona.

Mckenzie AJ, Petty SJ, Toms MP & Furness RW. 2007. Importance of Sitka Spruce *Picea sitchensis* seed and garden bird-feeders for Siskins *Carduelis spinus* and Coal Tits *Periparis ater*. Bird Study 54: 236-247.